

YOU GO !

I GO !

HERE WE GO !!

平成35年国民体育大会・全国障害者スポーツ大会基本構想骨子

2015.7.9. Thu

めざすのは、

選手、スタッフ、観客、ゲームメーカーなど、両大会に関わるすべての人々が

最高のパフォーマンスを発揮し、

誰もが自分のスタイルでスポーツを楽しみ

共感し合えることの喜びを、

佐賀から発信する大会。

そのために、

両大会の準備段階から、大会の開催、そして大会が終わったあともずっと、

あなたの心に、

わたしの心に、

みんなの心に、

スポーツを通じた共感、共鳴、一体感が生まれるように、
地域のさまざまなヒト、モノ、コトとの融合を念頭に、
これから取組みを行っていきます。

コンセプトワードは、**融合**。

さあ、大会の成功に向けて、

あなたも、わたしも、みんなでスタートダッシュ！

You go ! I go ! Here we go !!

Ⅱ 両大会への思い feelings

融合は、もう始まっている。

子どもも、大人も、障害者も、高齢者も、

スポーツを楽しみ、共感する心は皆ひとつ。

だからこそ、

平成35年佐賀県で開催する「国民体育大会」「全国障害者スポーツ大会」の基本構想は、

全国で初めて、一つの構想として作成しました。

年齢、性別、障害の有無にかかわらず、誰もが住み慣れた地域の中で、気軽に集い、交流し、お互いに個性を尊重しあいながら生き生きと暮らしていける社会。

スポーツには、そうした社会の実現のために、みんなの心をひとつにする“ちから”があります。

佐賀県では、競技スポーツ、生涯スポーツ、障害者スポーツ、プロスポーツなどを一元的に推進しており、たとえば「県民体育大会」・「佐賀県障害者スポーツ大会」・「さがねりんピック」の3大会の愛称を「佐賀スポーツフェスタ」に統一し、開会式や一部競技を合同で実施するなど、他県に先駆けて融合の形を模索しています。

こうした中、平成35年の両大会開催に向けても、基本構想作成の段階から両大会について一緒に考え、さまざまな立場の方の思いやご意見をお聞きしながら、全国で初めて、一つの構想として作成しました。

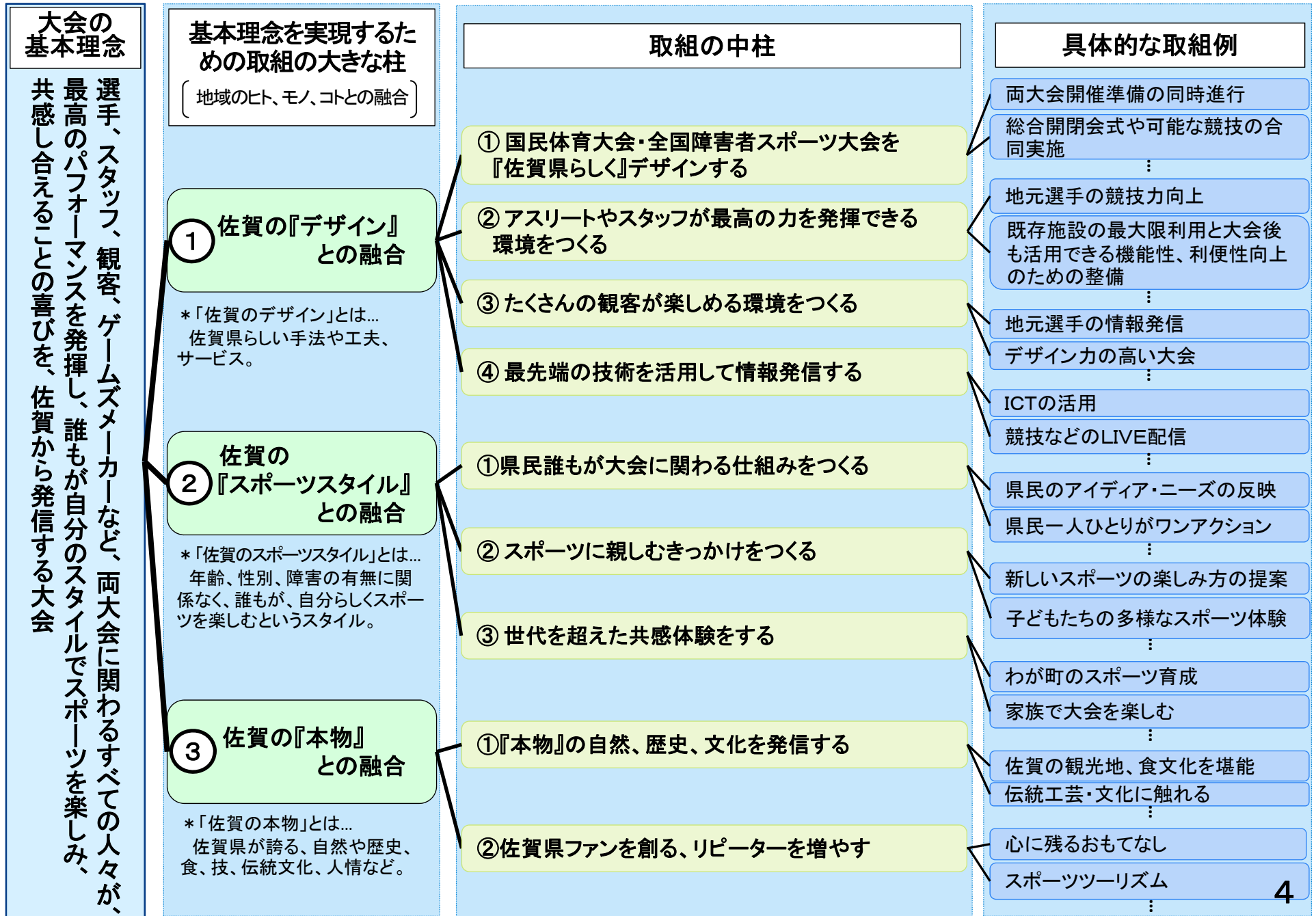
この基本構想では、「めざす大会」の実現のために、両大会と地域のさまざまなヒト、モノ、コトとの融合を打ち出しています。

両大会を通してみんなの心が融合し、誰もが自分のスタイルでスポーツを楽しみ、共感し合える喜びを、佐賀から発信していきたいと思えます。

目次

I	プロローグ	1
II	両大会への思い	2
III	基本構想体系図	4
IV	国民体育大会・全国障害者 スポーツ大会の概要	8
V	スポーツを取り巻く環境	9
VI	エピローグ	10

Ⅲ 平成35年国民体育大会・全国障害者スポーツ大会 基本構想体系図



大きな柱1 佐賀の『デザイン』との融合

*「佐賀のデザイン」とは…
佐賀県らしい手法や工夫、サービス。

取組の中柱1：国民体育大会・全国障害者スポーツ大会を
『佐賀県らしく』デザインする

- ・具体的な取組例
- ① 両大会開催準備の同時進行
 - ② 総合開閉会式や可能な競技の合同実施
 - ③ 国民体育大会へのエキシビジョン競技の導入

取組の中柱2：アスリートやスタッフが最高の力を発揮できる環境をつくる

- ・具体的な取組例
- ① 地元選手の競技力向上
 - ② 既存施設の最大限利用と大会後も活用できる機能性、利便性向上のための整備
 - ③ 快適な宿泊・スムーズな輸送環境づくり
 - ④ ゲームメーカー育成システムの構築

取組の中柱3：たくさんの観客が楽しめる環境をつくる

- ・具体的な取組例
- ① 地元選手の情報発信
 - ② デザイン力の高い大会
 - ③ 周辺イベントの充実

取組の中柱4：最先端の技術を活用して情報発信する

- ・具体的な取組例
- ① ICTの活用
 - ② 競技などのLIVE配信
 - ③ オンタイムでの大会情報の発信

大きな柱2 佐賀の『スポーツスタイル』との融合

*「佐賀のスポーツスタイル」とは…

年齢、性別、障害の有無に関係なく、誰もが、自分らしくスポーツを楽しむというスタイル。

取組の中柱1：県民誰もが大会に関わる仕組みをつくる

- ・具体的な取組例
- ① 県民のアイディア・ニーズの反映
 - ② 県民一人ひとりがワンアクション
 - ③ スポーツの魅力の再発見、PR

取組の中柱2：スポーツに親しむきっかけをつくる

- ・具体的な取組例
- ① 新しいスポーツの楽しみ方の提案
 - ② 子どもたちの多様なスポーツ体験

取組の中柱3：世代を超えた共感体験をする

- ・具体的な取組例
- ① わが町のスポーツ育成
 - ② 家族で大会を楽しむ
 - ③ 学校での全都道府県応援団の結成

大きな柱3 佐賀の『本物』との融合

*「佐賀の本物」とは…

佐賀県が誇る、自然や歴史、食、技、伝統文化、人情など。

取組の中柱1：『本物』の自然、歴史、文化を発信する

- ・具体的な取組例 ① 佐賀県の観光地、食文化を堪能
- ② 伝統工芸・文化に触れる
- ③ 佐賀県の本物の再認識

取組の中柱2：佐賀県ファンを創る、リピーターを増やす

- ・具体的な取組例 ① 心に残るおもてなし
- ② スポーツツーリズム

IV 国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の概要

国民体育大会

昭和21（1946）年の第1回大会開催以来、毎年各都道府県持ち回り方式で、また、第3回大会からは都道府県対抗方式で、国民スポーツの普及、競技者・指導者の育成、スポーツ施設の整備、スポーツ組織の充実など、スポーツ振興体制の確立とスポーツ文化の形成に総合的に寄与する、国民の各層を対象とする体育・スポーツの祭典として開催されている。

昭和36（1961）年からは国のスポーツ振興法に、平成23（2011）年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、日本体育協会・文部科学省・開催地都道府県の三者共催で行われている。

本県では、昭和51（1976）年に「さわやかに すこやかに おおらかに」のスローガンの下、スポーツの本質と本県の実情に即した実質国体を目指して、「若楠国体」をテーマとして開催した。

全国障害者スポーツ大会

昭和40（1965）年から身体に障害のある人々を対象に行われてきた「全国身体障害者スポーツ大会」と、平成4（1992）年から知的に障害のある人々を対象に行われてきた「全国知的障害者スポーツ大会」を統合した大会として、平成13（2001）年から国民体育大会終了後に、国民体育大会と同じ開催地で開催されている。

大会は、障害のある人々の社会参加の推進や、国民の障害のある人々に対する理解を深めることを目的に開催されている。

平成23（2011）年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、日本障がい者スポーツ協会・文部科学省・開催地都道府県等の共催で行われている。

本県では、昭和51（1976）年に「がんばってはげましあってわく希望」のスローガンの下、2日間の日程で全国身体障害者スポーツ大会を開催した。



V スポーツを取り巻く環境

【国内の環境】

- (1) 人口の減少と少子高齢化の進行
- (2) 定期的な運動・スポーツ実施者の割合増加(特に高齢者)と、その男女差の縮小
- (3) 障害者スポーツの認知度アップと、競技性の高いスポーツの出現
- (4) オリンピック・パラリンピック東京大会をはじめ、スポーツの国際大会の国内開催
- (5) スポーツ庁の設置

【県内の環境】

- (1) 全国よりも早いペースでの人口減少が進む予測
- (2) 運動・スポーツ実践の二極化とスポーツの健康志向・個人志向
- (3) 健常者に比べて低い障害者スポーツの実施率
- (4) 県スポーツ行政の一元化
- (5) 年齢、性別、障害の有無等に関係なく楽しめるスポーツイベントの開催
- (6) スポーツツーリズムの推進

そして、ある家族の会話

「国民体育大会」・「全国障害者スポーツ大会」の佐賀県開催から歳月を経て、
佐賀県に住むある家族が、
こんな会話をかわしていたら、
両大会は本当の意味で、「めざした大会」を成功させたのだと、
わたしたちは誇りに思います。

子「お父さん、見て見て！ドリブルうまくなったでしょ。」

父「おう、なった、なった。」

母「最近、よく外で遊んでるわね。」

父「自然がいっぱいだし、子育てもしやすいし、そんな環境が気に入って、君の実家の佐賀に移ってきたけど、佐賀って職場でも、ご近所でも、ジョギングとか、スポーツとか何かやっている人が多いよね。昔からこうなの？」

母「ううん。今ほどじゃなかったけど。私が高校生のとき、国体と障害者スポーツの全国大会があったのよ。私はスポーツは苦手だったけど、友達とゲームズメーカーとして参加したの。佐賀県の選手がたくさん活躍して、結構、盛り上がったし楽しかったな。あれからかなあ、いやそのちょっと前からかな、わたしみたいに軽い運動始める人が増えたのは。」

父「ふーん。そういえば、よく大学部活の合宿や海外チームのキャンプもやって来るよね。」

子「お父さん、今度、車椅子バスケの選手もくるんだよ。ねえ、一緒に試合見に行こうよ！」

父「あれは見ごたえあるからなあ。よし、行こう！」

You go ! I go ! Here we go !!

